

シリーズ 直弼のころ テーマ展「井伊直弼のことば—手紙にあらわれた人柄—」展示作品リスト

No.	指定	作品名称	年代	所蔵	注目することば・内容
1		井伊直弼画像 <small>いいなおすけがぞう</small>	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）	
(1) 揺れる幕府政治に直面して					
2	重文	別段存寄書下書 <small>べつだんぞんじよりがきしたがき</small>	嘉永6年（1853）8月	当館（彦根藩井伊家文書）	「年月を経て必勝万全」ペリー来航の際、直弼が幕府に提出した外交意見書の下書き。積極的な海外進出策を唱える。
3	重文	井伊直弼書状 長野義言宛 <small>いいなおすけしよじょう ながのよときあて</small>	安政5年（1858）2月26日	当館（彦根藩井伊家文書）	「上（将軍徳川家定）の思し召し通りに取り計らい申すべきは臣下の当然の義」江戸にいる直弼が、京都にいる側近の長野に宛てて送った手紙。将軍継嗣問題について、将軍徳川家定自身の意向を第一に考えるべきことを主張する。
4	重文	井伊直弼大老就任誓詞控 <small>いいなおすけたいろうしゅうにんせいしひかえ</small>	安政5年（1858）4月25日	当館（彦根藩井伊家文書）	「公儀を重んじ（将軍の御為第一に存じ奉り）」直弼が江戸幕府の大老に就任するに際し、公儀（幕府）を重んじ、将軍のためを第一に考えて奉公することを誓ったもの。
5	重文	井伊直弼書状案 九条尚忠宛 <small>いいなおすけしよじょうあん くじょうひさただあて</small>	安政5年（1858）6月27日	当館（彦根藩井伊家文書）	「内間一洗の上、外夷の所置に取り掛かるべき」勅許を得ないまま通商条約に調印したことを、関白九条に弁明した手紙。内憂を取り除いたうえで外国勢力に臨むことは、直弼の一貫した考え。
6	重文	井伊直弼書状案 間部詮勝宛 <small>いいなおすけしよじょうあん まなべあきかつあて</small>	安政5年（1858）10月26日	当館（彦根藩井伊家文書）	「国家の御大事に及ぶべし」朝廷との交渉のため、京都に派遣した老中の間部を叱咤する手紙の案文。側近の宇津木景福の筆によるものだが、取り上げる箇所には直弼が修正を加えており、直弼の考えがよくあらわれている。
(2) 井伊家当主としての自負					
7	重文	井伊直弼書状 犬塚外記宛 <small>いいなおすけしよじょう いぬづかけきあて</small>	弘化3年（1846）2月29日	当館（彦根藩井伊家文書）	「重荷をおろし候 心持ち」世継ぎとして初めて将軍に拝謁したときの手紙。初めて将軍と対面することへの緊張感や、無事に勤めを終えた安堵感が感じられる。
8	重文	井伊直弼書状 安東貞信宛 <small>いいなおすけしよじょう あんどうさだのぶあて</small>	弘化4年（1847）2月23日	当館（彦根藩井伊家文書）	「当家の瑕瑾この上無く候」兄直亮が相州の沿岸警衛を拝命したことに對し、井伊家の家格を傷つけるものとして批判した手紙。

No.	指定	作品名称	年代	所蔵	注目することば・内容
9	重文	井伊直弼書状 三浦十左衛門・大鳥居彦六宛 <small>いいなおすけしよじょう みうらじゆうざえもん・おおとりいひころうあて</small>	嘉永3年（1850）10月9日	当館（彦根藩井伊家文書）	「是非々々出府待ち居り候」直亮の死をうけて、三浦・大鳥居ら信頼する家臣に筆頭家老の木俣よりも先に江戸に出てくることを命じた手紙。着々と家を継ぐ準備を進めている。
10	重文	井伊直弼書状 三浦十左衛門宛 <small>いいなおすけしよじょう みうらじゆうざえもんあて</small>	嘉永4年（1851）11月頃カ	当館（彦根藩井伊家文書）	「長く仁政を施し、上下の和を一つにし」直弼が井伊家の家督を相続するに際し、「仁政」への意思を表明した手紙。
11	重文	井伊直弼請書控 朝廷宛 <small>いいなおすけうけしよひかえ ちやうていあて</small>	安政6年（1859）3月20日	当館（彦根藩井伊家文書）	「御守護の義は、東照宮（徳川家康）以来私家へ御委任」禁裏（朝廷）守護は井伊家に委任されてきたものという直弼の認識を表明したもの。
(3) 日常の一言					
12	重文	うもれぎのやのことば うもれぎのやの言葉	天保5年（1834）	当館（彦根藩井伊家文書）	井伊家を継ぐことや、他の大名家の養子となる道を絶たれた失意の直弼が、自らのなすべきことに取り組む決意を述べたもの。
13	重文	井伊直弼書状 犬塚外記宛 <small>いいなおすけしよじょう いぬづかけきあて</small>	弘化2年（1845）8月19日	当館（彦根藩井伊家文書）	「小子（私）事は何分木訥者」直弼が自身の性格を述べた手紙。木訥者、大臆病者など、自身の欠点を挙げる。
14	重文	井伊直弼書状 犬塚外記宛 <small>いいなおすけしよじょう いぬづかけきあて</small>	弘化3年（1846）6月14日	当館（彦根藩井伊家文書）	「武家の子は武家風に」長浜の大通寺に預けられた娘弥千代の育て方に対して注文を出した手紙。娘の育て方を案じる父の姿を見ることができる。
15	重文	井伊直弼書状 犬塚外記宛 <small>いいなおすけしよじょう いぬづかけきあて</small>	弘化3年（1846）12月11日	当館（彦根藩井伊家文書）	（江戸は）「さてきていやな所」地震・火事が多い江戸に対して不満をこぼしたもの。世継ぎとして江戸に出て間もない時期のもので、慣れない土地への戸惑いを見せる。
16	重文	井伊直弼書状 三浦十左衛門宛 <small>いいなおすけしよじょう みうらじゆうざえもんあて</small>	嘉永3年（1850）9月27日	当館（彦根藩井伊家文書）	「報恩のため御看病申したく」報恩のため、彦根に戻って危篤状態の直亮の看病をしたいと願う手紙。直亮には反感を抱いていたが、死の直前には恩に報いたいと考えていた。
17	重文	井伊直弼書状 撰専宛 <small>いいなおすけしよじょう せんせんあて</small>	嘉永6年（1853）6月晦日	当館（彦根藩井伊家文書）	「異船渡来致さざる様祈念致し候より外はこれ無く」ペリー一乗航をうけて、再び来航しないよう祈禱するよう願ったもの。予期せぬ状況に直面して、神仏にすがろうとする直弼の姿を見ることができる。

## 主要展示作品解説

- 1 <sup>べつだんぞんじよりがきしたがき</sup>別段存寄書下書 1通 【展示リスト2】  
縦25.4cm 横223.8cm <sup>かえい</sup>嘉永6年(1853)8月  
当館蔵(彦根藩井伊家文書)

注目することば：「年月を経て必勝万全」

嘉永6年(1853)6月にアメリカのペリーが来航したことをうけ、直弼が幕府に提出した外交意見書の下書き。他の大名の多くが欧米諸国に対して抗戦することを主張したのに対し、直弼は欧米諸国との軍事力の差を認め、いったんは交易を許容するように述べています。当時の状況を冷静に見極め、現実的な方策を主張していることがわかります。

ただし、注意しなければならないのは、直弼の交易許容論は、ゆくゆくは鎖国に戻すことを念頭に置いたものだということです。直弼は、海外に船を派遣して交易をしつつ、海軍の調練を進め、欧米諸国に対抗しうるだけの力をつけることを主張しています。すぐに無謀な抗戦をするのではなく、「年月を経て必勝万全」の体制を整えたうえで、再び鎖国に戻すというのが、直弼の構想でした。

- 2 <sup>い い なおすけしよじょう あんどうさだのぶあて</sup>井伊直弼書状 安東貞信宛 1通 【展示リスト8】  
縦15.7cm 横153.5cm <sup>こうか</sup>弘化4年(1847)2月23日  
当館蔵(彦根藩井伊家文書)

注目することば：「当家の瑕疵この上無く候」

弘化4年(1847)2月、彦根藩主井伊直亮は、当時日本近海にやって来るようになってきた外国船への対応として、江戸幕府から相州(神奈川県)の沿岸警衛を命じられます。この知らせに接した直弼は、彦根藩士の安東に宛てた手紙の中で、直亮が相州警衛を拝命したことは「当家の瑕疵」(瑕疵とは傷、または不名誉なこと)、つまり井伊家の家柄に傷をつけるものだと、怒りをあらわにしています。

直弼がこだわった井伊家の家柄とは、幕府を支える譜代大名筆頭というものであり、京都守護こそが家柄にふさわしい勤めだと認識していました。そして、家柄に見合わない勤めを命じられた原因は、兄である直亮の振る舞いにあると批判しているのです。

- 3 <sup>い い なおすけしよじょう いぬづかげ きあて</sup>井伊直弼書状 犬塚外記宛 1通 【展示リスト13】  
縦17.6cm 横161.5cm 弘化2年(1845)8月19日  
当館蔵(彦根藩井伊家文書)

注目することば：「小子(私)事は何分木訥者」

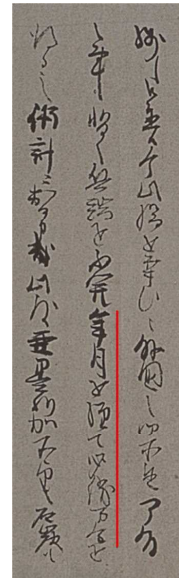
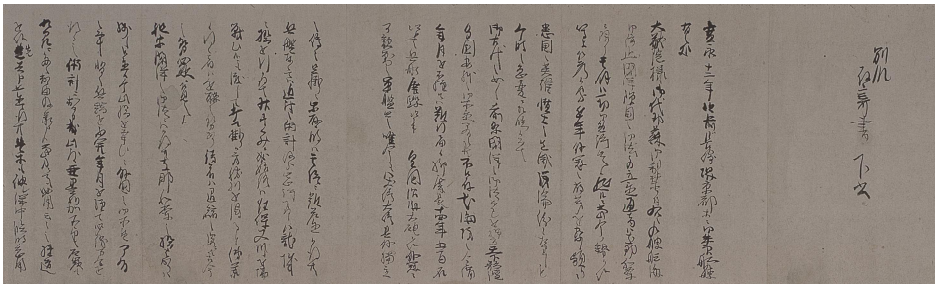
世子になる前の直弼が犬塚外記に宛てて、自己分析というべき内容をつづった手紙。犬塚は、直亮の側近を勤めた人物で、この頃の直弼がもっとも信頼していた藩士の1人でもありました。直弼はまず、自分は「木訥者」であるから、直亮の御前に出ても気の利いたことを言うことができないと述べます。さらに、「大臆病者」なので、直亮が好んだ「騎射」(馬上で弓を射る武芸)もしないのだと続けています。

直弼は自分の欠点を述べる一方で、藩の現状に対する批判の心情もにじませています。直亮の好みで「騎射」が流行しているために、他の武芸が軽視されていることを懸念しているのです。この約半年後、直弼は彦根藩の世継ぎとなり、直亮への反感を募らせていくこととなりますが、ここにはすでにその兆しが現れています。

べつだんぞんじよりがきしたがき

# 1 別段存寄書下書

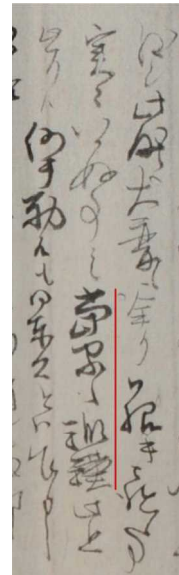
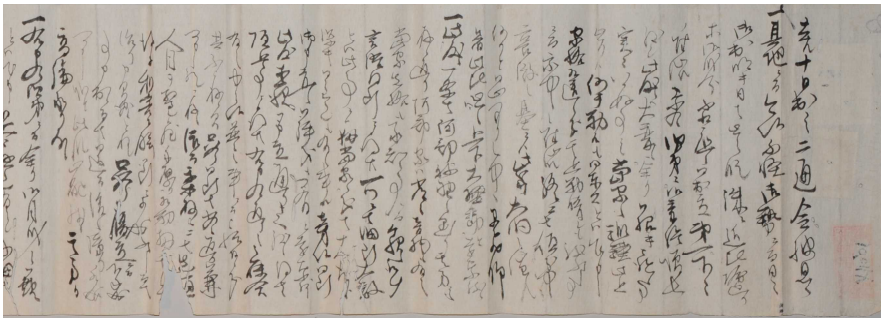
(下) 冒頭 (右) 「年月を経て必勝万全」部分 (本文22行目)



い い なおすけしよじょう あんどうさだのぶあて

# 2 井伊直弼書状 安東貞信宛

(下) 冒頭 (右) 「当家の瑕瑾」部分 (本文7行目)



い い なおすけしよじょう いぬづかぎ きあて

# 3 井伊直弼書状 犬塚外記宛

(下) 冒頭 (右) 「木訥者」部分 (本文18行目)

